

マネースクエア四季報 (2026/1)

2026 年 6 月までの為替相場展望

※ウィークリー・アウトルック次号は 26 年 1 月 12 日に配信予定です。

「マネースクエア四季報」は、3 カ月ごとに向こう 6 カ月の為替相場見通しを提示。四季報配信月を除く月末のマンスリー・アウトルックで見通しをアップデート、ウィークリー・アウトルックやその他のレポートで見通しに関わる相場材料を分析・解説します。

25 年(12 月 26 日まで)は「米ドル安」であり「円安」の 1 年でした。米ドル実効レートは 25 年 1 月 20 日のトランプ大統領就任前後にピークをつけ、下落基調が続きました。トランプ大統領の強硬な関税政策が米ドルへの信認を低下させた結果でしょう。米ドルは 25 年後半にやや持ち直しました。FRB が 9 月以降に利下げを再開したものの、米主要株価が高値更新を続けたことで、米国への資金流入が増えたためとみられます。

26年6月までの予想レンジ

通貨ペア	直近終値(12/26)	予想レンジ
米ドル/円	156.570	135.000 ~ 162.000
ユーロ/円	184.320	167.000 ~ 195.000
ユーロ/米ドル	1.17720	1.11000 ~ 1.25000
ユーロ/英ポンド	0.87153	0.82000 ~ 0.92000
英ポンド/円	211.490	195.000 ~ 220.000
英ポンド/米ドル	1.35070	1.22000 ~ 1.42000
豪ドル/円	105.150	100.000 ~ 110.000
豪ドル/米ドル	0.67161	0.64000 ~ 0.70000
豪ドル/NZドル	1.15080	1.13000 ~ 1.17000
NZドル/円	91.376	85.000 ~ 99.000
NZドル/米ドル	0.58361	0.55000 ~ 0.61000
カナダドル/円	114.520	110.000 ~ 120.000
米ドル/カナダドル	1.36720	1.33000 ~ 1.42000
トルコリラ/円	3.654	3.000 ~ 4.000
南アフリカランド/円	9.397	8.500 ~ 10.500
メキシコペソ/円	8.741	7.800 ~ 9.500
ノルウェークローネ/スウェーデンクローナ	0.91480	0.87000 ~ 0.95000
米ドル/シンガポールドル	1.2842	1.25000 ~ 1.31000

※予想レンジは、担当者個人がファンダメンタルズ分析やテクニカル分析などを基にして独自に判断したものであり、予告なく変更になる場合があります。

※最終的な投資判断はご自身で行っていただきますようお願いいたします。

26年6月までの予想レンジ

銘柄	直近終値(12/26)	予想レンジ
日本N225(円)	50,741	42,000 ~ 55,000
米国D30(ドル)	48,695	42,000 ~ 53,000
米国NQ100(ドル)	25,641	22,000 ~ 28,000
米国SP500(ドル)	6,926.4	6,200.0 ~ 7,500.0
英国F100(ポンド)	9,882(12/24)	9,000 ~ 10,000

※予想レンジは、市場調査課が独自に判断しており、予告なく変更になる場合があります。

※最終的な投資判断はご自身で行っていただきますようお願いいたします。

円実効レートは4月中旬にピークをつけて下落に転じました。日銀が利上げに慎重な姿勢を崩さなかったことが一因でしょう。10月に入ると円安が加速しました。高市氏が自民党総裁選に勝利し、首相に就任したことで、(責任ある)積極財政と緩やかな金融政策というポリシーミックス、いわゆるサナエノミックスが円安要因とみられたためです。

25年の対米ドル上昇率が大きかったのは、スウェーデンクローナ、メキシコペソ、ノルウェークローネ、ユーロなど。米ドル安の裏返しの面が強かったのでしょう。ノルウェークローネはノルゲバンク(ノルウェー中銀)が高い政策金利を維持、ユーロはECBの利下げ打ち止めが視野に入ったという金融政策面でのプラス材料がありました。

26年前半を展望して、重要テーマは金融政策と財政政策のポリシーミックスでしょう。

25年は日銀を除く多くの中銀が利下げ局面でした。26年は、以下の4つに分類できそうです。

- (A) 利上げ継続: 日銀
- (B) 利上げへの転換を模索: ECB(ユーロ圏)、RBA(豪州)、RBNZ(ニュージーランド)、BOC(カナダ)、リクス(スウェーデン)
- (C) 利下げ打ち止めを模索: BOE(英国)、ノルゲ(ノルウェー)、BOM(メキシコ)
- (D) 利下げを継続: FRB(米国)、TCMB(トルコ)、SARB(南アフリカ)

金融政策面からみた通貨の序列は強い順に、(A) > (B) > (C) > (D)と考えられます。もちろん、各グループ内で濃淡はあるでしょうし、今後の展開次第で変化もあるでしょう。さらに、財政政策が国債価格(市場金利)や政権への信認を通して通貨に影響を与えることも考慮する必要がありそうです。詳細は各通貨ペアの項をご参照ください。

◇2026年6月までの主なイベント:

- 1月1日 ユーロ圏各国26年度開始
- 1月? 衆議院・解散総選挙?
- 1月~2月? トランプ関税・クックFRB理事解任に関する最高裁判断?
- 2月6日 米雇用統計の年次改定
- 2月24日 ロシアのウクライナ侵攻から4年

- 2月28日 米12地区連銀総裁任期満了
- 4月1日 日・英・カナダ26年度開始
- 5月15日 パウエルFRB議長の任期満了
- 6月11日 サッカーW杯北米大会開幕(～7月19日)
- 6月14日 G7首脳会議(フランス・エビアン)

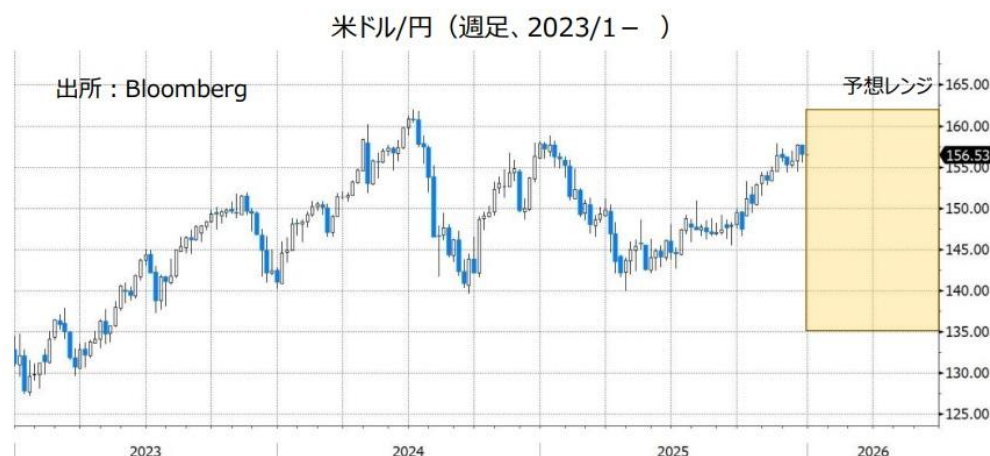
米ドル/円:135.000 円～162.000 円

24年の初めに6%近くあった日米の政策金利差は足もとで3%弱まで縮小しています。日銀が利上げを、FRBが利下げを続ければ、政策金利差が一段と縮小して、いずれ米ドル/円の下落要因となりそうです。もっとも、25年10月以降の市場のテーマは「サナエノミクス＝円安」であり、それはまだしばらく続くかもしれません。また、日銀が利上げをしても、しばらくは実質政策金利のマイナスは解消されず、円の重石になりそうです。

26年6月までに米ドル/円が顕著に下落するとすれば、以下のケースが考えられます。まず、目立って米ドル/円が上昇して本邦当局が円買い介入に踏み切るケース。24年4～7月には15兆円超の米ドル売り円買いが実施され、米ドル/円は7月中に一時約10円下落しました。

次に、米景気の低迷が鮮明となり、業績見通しの修正から米株が大きく調整するケース。その場合、市場でリスクオフが強まって円が全面的に買われるでしょう。24年4～7月の介入後、8月に米ドル/円が一段と下落したのは、「植田ショック」による株価急落の影響が大きかったのでしょう。

そして、トランプ政権に対する市場の信認が大きく棄損されるケース。最高裁がトランプ関税違法との判断を示せば、トランプ政権にとって大きな打撃となりそうです。また、徴収した関税の返還を求められれば、財政赤字拡大の懸念が強まり、多くの経済政策が見直しを迫られるかもしれません。また、トランプ大統領による次期FRB議長の指名などで、中央銀行の独立性が大きく阻害されると市場が判断するケースでも米ドルには下落圧力が加わりそうです。＜西田＞



ユーロ/円:167.000 円~195.000 円

ユーロ/米ドル:1.11000 米ドル~1.25000 米ドル

ユーロ/英ポンド:0.82000 ポンド~0.92000 ポンド

ECB は 24 年 6 月以降 25 年 6 月まで計 8 回利下げを行い、政策金利(中銀預金金利)を当初の 4.00%から 2.00%まで引き下げました。その後は政策金利を据え置いており、そのまま利下げサイクルが終了する可能性が高まっています。12 月の理事会では経済見通しが上方修正されました。また、ラガルド総裁は据え置きが全会一致だったと明らかにし、「利下げも利上げも議論されなかった」と述べました。匿名関係者によれば、最新の経済予測を踏まえて、利下げ局面は終了する公算が大きいとの認識が ECB 内で共有されているとのことでした。

米ドル/円の項で指摘したように、米景気の低迷で株価が大きく下落する、あるいはトランプ政権に対する市場の信認が大きく棄損されるケースでは、米ドルの裏返しとしてのユーロの性格が明確に表われそうです。

ユーロのアキレス腱はフランスの政治情勢かもしれません。26 年 1 月に始まる新年度の予算に関連して、バイル政権が 9 月国民議会の不信任により倒れ、10 月にルコルニュ政権が誕生しました。ルコルニュ首相はマクロン大統領が望んだ年金給付年の引き上げ(62⇒64 歳)を棚上げして国民議会の信任を得ましたが、予算は成立せずに 2 年連続で緊急予算法によって新年度を迎えます。年明け後に予算交渉は続けられますが、予算成立の見通しは立っていません。ルコルニュ政権が倒れる事態ともなれば、総選挙も視野に入ります。フランスの政治不安はユーロの重石になりかねません。

ユーロ/英ポンドは、16 年の英国の国民投票(ブレグジット決定)を受けて大きく上昇した後、0.82 ポンド~0.92 ポンドを中心としたレンジで推移してきました。12 月 6 日時点でそのレンジのほぼ中心に位置しており、レンジ内での推移が続きそうです。ECB の利下げ打ち止め予想に対して、BOE(英中銀)は 26 年中に 1~2 回の利下げが予想されており、金融政策面ではユーロがやや有利。ただ、フランスの政治情勢や安全保障面での差(ユーロ圏がウクライナ・ロシアと地続きである一方、英国は海峡を挟んでいる点)などは英ポンドに有利に働く可能性がありそうです。〈西田〉





英ポンド/円: 195.000 円～220.000 円

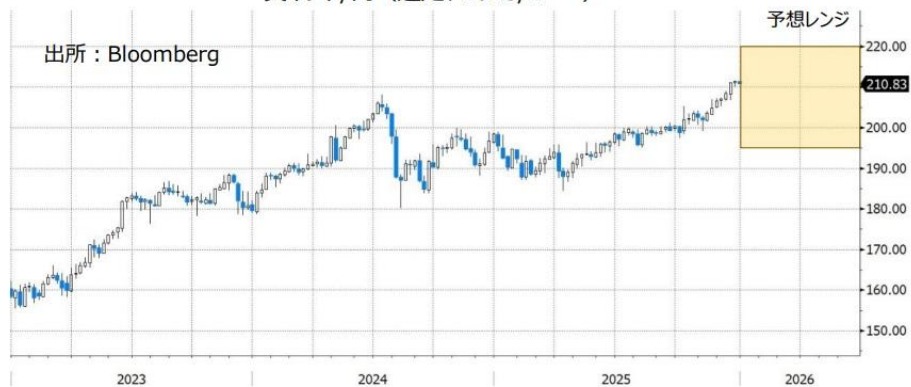
英ポンド/米ドル: 1.22000 米ドル～1.42000 米ドル

BOE(英中銀)は、24 年 8 月の利下げ開始以降 3 カ月(2 会合)に 1 度のペースで 0.25%の利下げを続けてきましたが、25 年 11 月を飛ばして 12 月に利下げを行いました。12 月の利下げは 5 対 4 と僅差での決定(4 人が据え置き支持)。ベイリー総裁は「政策金利はゆっくりと低下する方向だが、利下げするほどに一層際どい判断になる」と述べ、また政策金利が中立水準に接近するほどに利下げ余地は限定的になるとの見解も示しました。

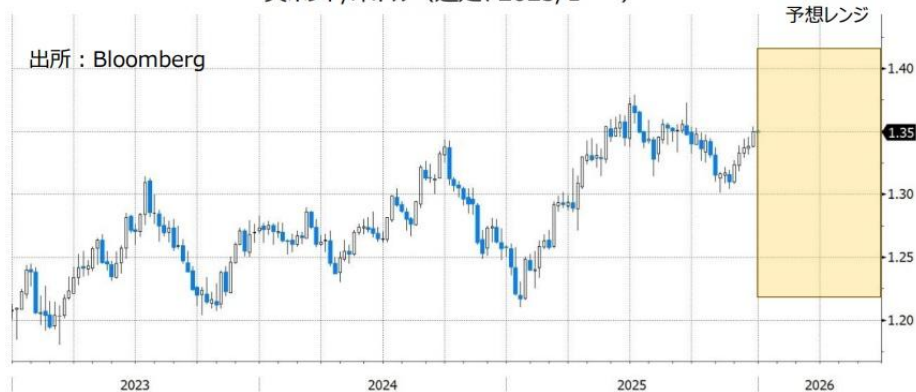
もっとも、英国の CPI が BOE の予想通り 9 月ごろから鈍化傾向が鮮明になりつつあるため、利下げ余地はありそう。また、26 年 4 月に始まる新年度の政府予算案がある程度緊縮的だと判断されたことも利下げ観測を後押ししています(もっとも、赤字削減策の過半は 28 年以降となっており、予算案に対する市場の評価は変わる可能性もあります)。

12 月 26 日時点の OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、市場は 26 年 12 月までに 0.25%×1.5 回の利下げを織り込んでいます。同じく OIS は 26 年 12 月までに FRB の利下げを 0.25%×2.3 回織り込んでいます。＜西田＞

英ポンド/円（週足、2023/1－ ）



英ポンド/米ドル（週足、2023/1－ ）



豪ドル/円:100.000 円～110.000 円

豪ドル/米ドル:0.64000 米ドル～0.70000 米ドル

豪ドル/NZドル:1.13000NZドル～1.17000NZドル

RBA(豪中銀)は25年2月・5月・8月の政策会合でそれぞれ0.25%の利下げを実施。9月・11月・12月の会合では政策金利を3.60%に据え置きました。

ブロック RBA 総裁は12月の会合後の会見で「さらなる利下げは必要ないと考えている」と述べ、追加利下げの可能性を否定。また、「(RBA は)現在のインフレ率の水準に満足しておらず、インフレ率を引き下げるために必要なことを行う」とし、「データがインフレの鈍化を示唆しない場合、26年2月の会合で(利上げを)検討する」と語りました。

市場では、RBA による利下げは打ち止めとなり、次の動きは利上げになると予想されています。OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、RBA は早ければ26年5月に利上げを行い、26年末までに0.25%の利上げを2回実施するとの見方が優勢です。一方、FRB(米連邦準備制度理事会)は今後さらに利下げを行いそうです。RBA と FRB の金融政策面からみれば、豪ドル/米ドルには上昇圧力が加わりやすいとみられます。

豪ドル/円も堅調に推移する可能性があります。日銀の追加利上げのペースは緩やかになるとみられ、日銀と比較してRBAの政策金利の水準が高い状況に大きな変化はないと考えられるからです。

豪ドルには投資家のリスク意識を反映しやすいという特徴があります。日米など主要国の株価が堅調に推移するなどしてリスクオン(リスク選好)が強まる場合、豪ドルのサポート要因になりそうです。

【豪ドル/NZドル】

市場では、RBA と RBNZ のいずれも、利下げサイクルは終了して“次の動きは利上げ”になると予想されています。ただ、利上げ開始のタイミングは RBNZ よりも RBA の方が早くなるとの見方が有力であり、実際にそのとおりになれば、豪ドル/NZドルは堅調に推移するかもしれません。

ただし、RBNZ もいずれ利上げを開始するとみられます。その場合、RBNZ は 24 年と 25 年に大幅な利下げ(合計 3.25%。RBA は合計 0.75%)を実施した分、利上げ幅も大きくなる可能性があります。

＜八代＞



NZドル/円:85.000 円～99.000 円

NZドル/米ドル:0.55000 米ドル～0.61000 米ドル

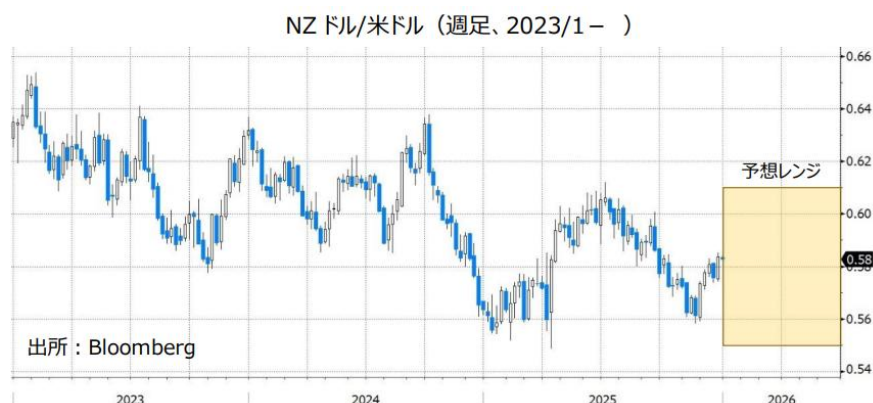
RBNZ(NZ 中銀)は 24 年 8 月に利下げを開始し、25 年 11 月まで 9 回合計 3.25%の利下げを行いました。25 年 12 月 26 日時点の政策金利は 2.25%です。

25 年 11 月に公表された RBNZ による政策金利予測では、現局面の利下げサイクルの最終到達水準は 2.20%でした。現在の政策金利のわずか 0.05%下の水準であり、RBNZ の利下げは打ち止めになる可能性があります。

OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、市場では RBNZ による利下げサイクルは終了し、26 年後半に 0.25%の利上げが 2 回行われるとの見方が優勢です。一方、FRB は今後さらに利下げを行うと予想されます。RBNZ と FRB の金融政策面からみれば、NZドル/米ドルには上昇圧力が加わりやすいと考えられます。

NZ ドル/円も堅調に推移する可能性があります。日銀は今後追加利上げを行うとみられるものの、そのペースは緩やかになりそうです。日銀と RBNZ の政策金利差はそれほど縮小しないと考えられるからです。

NZ ドルは豪ドルと同様に投資家のリスク意識を反映しやすいという特徴があります。日米など主要国の株価が堅調に推移するなどしてリスクオン(リスク選好)が強まる場合、NZ ドルのサポート要因になりそうです。〈八代〉



カナダドル/円: 110.000 円～120.000 円

米ドル/カナダドル: 1.33000 カナダドル～1.42000 カナダドル

BOC(カナダ中銀)は24年6月に利下げを開始し、25年10月まで9回合計2.75%の利下げを実施。25年12月の会合では政策金利を2.25%に据え置くとともに、「現在の政策金利は、経済を支えつつインフレ率を2%近辺に維持するのに、ほぼ適切な水準だ」との認識を示しました。

市場は、BOCによる利下げは打ち止めで次の動きは利上げになると予想。OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、市場では26年終盤に利上げが行われるとの見方が優勢です。FRBが今後さらに利下げを行う場合、BOCとFRBの金融政策面から米ドル/カナダドルは軟調に推移しそうです。

原油価格が大きく変動する場合、その動向も相場材料になるかもしれません。カナダドルにとって原油価格の上昇はプラス、原油価格の下落はマイナスになると考えられます。

USMCA(米国・メキシコ・カナダ協定)の見直しが26年7月までに行われる予定です。USMCAはトランプ政権1期目の20年7月1日に発効し、発効6年目に協定締結国共同で見直すことが協定に定められています。USMCAの見直し交渉にも注目です。仮に交渉が難航する場合、カナダドルにとってのマイナス材料になる可能性があります。〈八代〉



トルコリラ/円:3.000 円～4.000 円

TCMB(トルコ中銀)は 25 年 12 月の政策会合で 1.50%利下げすることを決定。政策金利を 39.50%から 38.00%へと引き下げました。TCMB による利下げは 4 会合連続で、24 年 12 月以降の利下げ幅は合計 12.00%となりました。

TCMB は 25 年 12 月会合の声明で「実際のインフレ率やインフレ期待、およびそれらの基調を踏まえ、中間目標(※)に沿ったデシインフレの道筋に必要な引き締め度合いを確保するように政策金利を決定する」、「(政策)措置の規模は、インフレ見通しを重視しつつ会合ごとに慎重に見直す」と表明しました。これらは 10 月の会合と同じであり、TCMB は今後さらに利下げする可能性があります。TCMB による利下げはトルコリラにとってのマイナス材料と考えられます。

(※)TCMB のインフレ目標は 5%です。ただし、TCMB は中間目標として、インフレ率を 26 年末までに 16%、27 年末までに 9%へと鈍化させることを掲げています。トルコの 25 年 11 月の CPI 上昇率は前年比 31.07%でした。＜八代＞



南アフリカランド/円:8.500 円～10.500 円

SARB(南アフリカ中銀)は 24 年 9 月に利下げを開始し、25 年 11 月まで 6 回合計 1.25%の利下げを実施。25 年 12 月 26 日時点の政策金利は 6.75%です。

市場では SARB は今後さらに利下げすると予想されています。ただ、SARB は 25 年 11 月にインフレ目標をこれまでの「3～6%」から「3%プラスマイナス 1%」へと引き下げました。SARB はこれまでよりも追加利下げに慎重になるかもしれません。南アフリカの 25 年 11 月の CPI 上昇率は前年比 3.5%でした。CPI の今後の動向次第では SARB による利下げ停止観測が市場で浮上する可能性があり、その場合には南アフリカランドにとってのプラス材料になりそうです。＜八代＞



メキシコペソ/円: 7.800 円 ~ 9.500 円

BOM(メキシコ中銀)は24年3月に利下げを開始し、25年12月まで合計4.25%の利下げを行いました。25年12月26日時点の政策金利は7.00%です。

25年12月会合の声明ではフォワードガイダンス(先行きの金融政策の示唆)が修正されました。直近2会合(25年9月と11月)は今後について「政策金利の引き下げを検討する」でしたが、今回は「追加的な政策金利調整のタイミングを検討する」になりました。BOMは利下げをいったん停止する可能性があり、そのとおりになればメキシコペソにとってのプラス材料になりそうです。

カナダドルと同様、原油価格の動向やUSMCA(米国・メキシコ・カナダ協定)の見直し交渉にも注目です。原油が堅調に推移すればメキシコペソのサポート要因になると考えられる一方、USMCAの見直し交渉が難航すればメキシコペソの上値を抑える要因になるかもしれません。〈八代〉



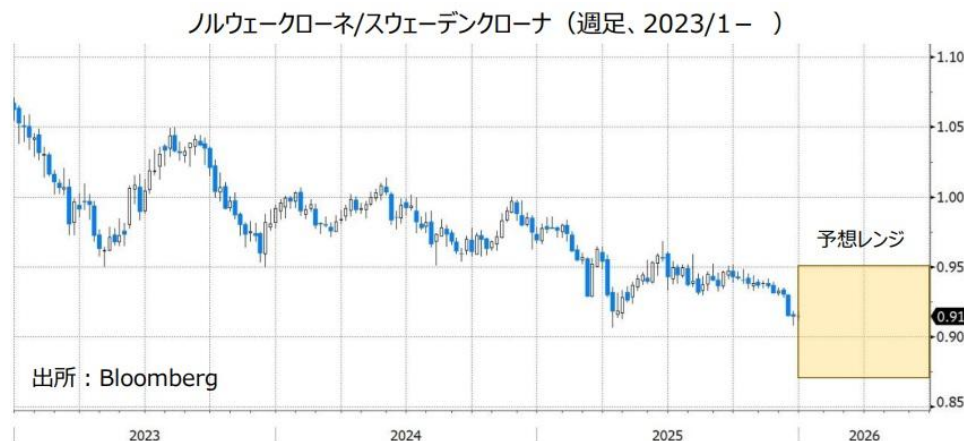
ノルウェークローネ/スウェーデンクローナ: 0.87000S クローナ ~ 0.95000S クローナ

リクスバンク(スウェーデン中銀)は24年5月から25年9月まで8回計2.25%の利下げを実施し、政策金利を1.75%としました。リクスバンクは12月の会合後の声明で、「政策金利1.75%での据え置きを決定し、当分の間はその水準にとどまると予想している」と表明。公開した政策金利予想では、26年7-9月期まで1.75%にとどまり、10-12月期から少しずつ上昇する(利上げ開始)との見通しです。

ノルゲバンク(ノルウェー中銀)は12月の会合で政策金利を4.00%に据え置きました。声明では「経済が現在想定している通りに展開すれば、今後1年のうちに政策金利は引き下げられる」と表明されました。

スウェーデンとノルウェーの政策金利差はノルウェークローネに有利ですが、今後は政策金利差が縮小していくと予想されるため、徐々にスウェーデンクローナ有利へと変化する可能性があります。

ノルウェーは産油国であるため、NOK/SEKは原油価格にも影響を受けます。WTI原油先物価格は24年夏以降に緩やかな下落基調にあります。各国のインフレ率が鈍化していることも一因でしょう。また、OPECプラスが増産方向にあることも原油価格の重石になっています。原油価格が低位で安定すれば、NOK/SEKへの影響は小さいでしょう。＜西田＞

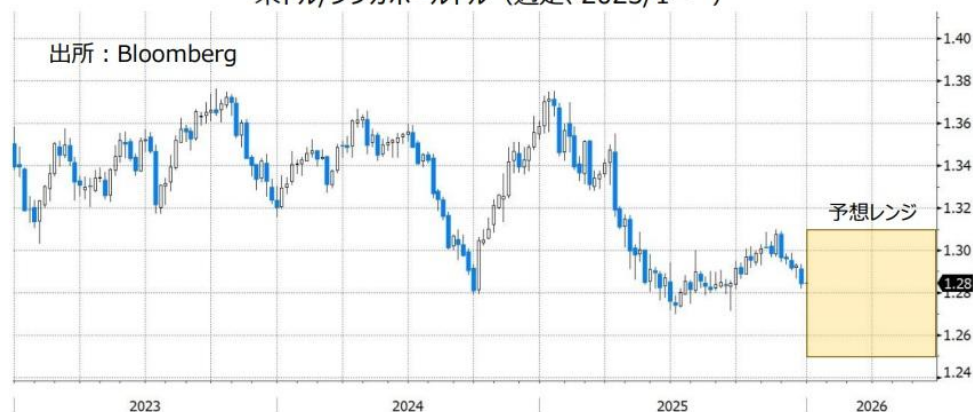


米ドル/シンガポールドル: 1.25000SGドル~1.31000SGドル

シンガポールの中央銀行にあたるMAS(シンガポール通貨庁)はS\$NEER(SGドル名目実効為替レート)を政策目標としており、それが緩やかに上昇するように誘導しています。過去10年は米ドル実効為替レートが比較的堅調に推移してきたため、S\$NEERの高め誘導と米ドル/シンガポールドル(以下、ドルシンガ)の横ばい推移は矛盾しなかったと考えられます。ドルシンガは15年から25年4月まで、1.30000SGドル~1.40000SGドルを中心とする比較的狭いレンジで推移してきました。

25年5月以降にドルシンガが上記中心レンジの下限(1.30000SGドル)を下回る場面が増えたのは、米ドルが軟調だったことと無関係ではないでしょう。02年から11年ごろまでも、ドルシンガは下落基調でした(SGドル高)。米ドル実効為替レートが下落基調にあったため、S\$NEERを安定あるいは高めに誘導するためにはドルシンガが下落する必要があったのでしょう。そのため、今後、米景気の失速や利下げの継続、株価の急落などで米ドル実効為替レートが下落するようであれば、ドルシンガにも下押し圧力が加わる可能性があります。＜西田＞

米ドル/シンガポールドル（週足、2023/1 - ）



今週の主要経済指標・イベント

			当社予想	市場予想	前回値
12月29日	8:50	【日】日銀金融政策決定会合における主な意見(12月18-19日開催分)			
12月30日	28:00	【米】FOMC議事録(12月9-10日開催分)			
1月1日		【日】【米】【英】【独】【カナダ】【豪】【NZ】【ノルウェー】【スウェーデン】祝日			
		【シンガポール】【メキシコ】【南アフリカ】【トルコ】祝日			
1月2日		【NZ】祝日			

市場予想はBloomberg、25年 12月29日9:00現在。発表日時は日本時間。

<執筆者>

執筆者プロフィール



西田 明弘(にしだ あきひろ)

市場調査部 チーフエコノミスト

日興リサーチセンター、米ブルッキングス研究所、三菱UFJモルガンスタンレー証券などを経て、2012年マネースクウェア・ジャパン(現マネースクエア)入社。
米国を中心とした各国のマクロ経済・金融政策・政治動向の分析に携わる。

「アナリスト、ストラテジスト、エコノミスト、研究員と呼び名は変われども、30年以上一貫してリサーチ業務を行ってきました。長い経験を通じて学んだことは、金融市場では何が起きても不思議ではないということ。その経験を少しでも皆さんと共有したいと思います。」

執筆者プロフィール



八代 和也(やしろ かずや)

シニアアナリスト

2001年ひまわり証券入社後、為替関連の市況ニュースの配信、レポートの執筆などFX業務に携わる。2011年、マネースクウェア・ジャパン(現マネースクエア)に入社。
豪ドル、NZドル、カナダドル、トルコリラ、南アフリカランド、メキシコペソを中心に分析し、レポート執筆のほか、M2TV出演、セミナー講師を務めている。

【プロフィール】 広島県出身。

【趣味】 野球・サッカー観戦。

【一言】 より分かりやすくタイムリーなレポートを心掛けています。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。

また、相場の行方を保証するものではありません。

お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです、当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
